



近代文学と熊本

——ラフカディオ・ハーンと夏目漱石——

熊本大学文学部 日本語日本文学研究室

近代文学と熊本

——ラフカディオ・ハーンと夏目漱石——

- 熊本大学の前身である旧制第五高等学校（五高）は、近代日本における多くの文化史上の人物と縁を持っています。
- そのような五高ゆかりの人物の中に、作品集『怪談』などで著名なラフカディオ・ハーン（小泉八雲 1850-1904）と、『吾輩は猫である』『心』などの小説で教科書でもおなじみの小説家の夏目漱石（夏目金之助 1867-1916）がいます。
- 熊本ゆかりの文学者、ラフカディオ・ハーンと夏目漱石について、両者の熊本時代とその文章をご紹介します。

1 ラフカディオ・ハーンの熊本時代(1)

- ラフカディオ・ハーン（Patrick Lafcadio Hearn 1850-1904）は、1890 年に来日し、1891 年 11 月に第五高等中学校英語教師として熊本に赴任しています。
- 熊本時代には五高で英語教師として勤務する一方、1894 年の秋に熊本を離れるまで、九州を中心に西日本各地を旅行しています。



1 ラフカディオ・ハーンの熊本時代(2)

- 熊本時代の経験は、『日本瞥見記』
Glimpses of Unfamiliar Japan (1894)、『東の国から』
Out of the East (1895) といった一連の同時期の著作に様々な反映されることとなります。
- 右の写真は、熊本大学構内にある五高時代のハーンをモチーフにしたレリーフ像です。



2 ラフカディオ・ハーン 「極東の将来」 (THE FUTURE OF THE FAR EAST) (1)

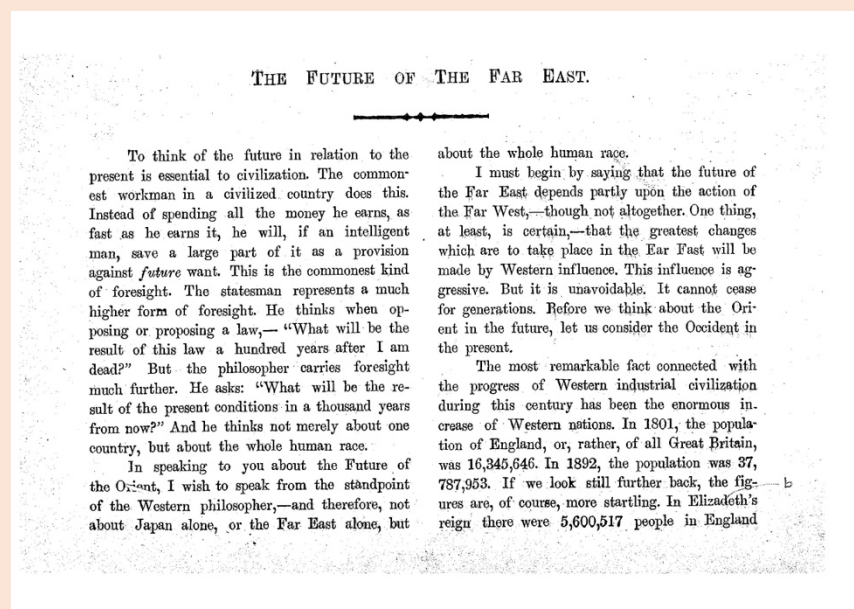
- ハーンを考える上で、その熊本時代の3年間は、日本社会と文化に対する理解がより深まった重要な時期といえるでしょう。
- その熊本時代のハーンの評論に第五高等学校の校友会誌であった『龍南会雑誌』第28号(1894年6月)の「附録」欄に発表された「極東の将来」(THE FUTURE OF THE FAR EAST) があります。



2 ラフカディオ・ハーン 「極東の将来」 (THE FUTURE OF THE FAR EAST) (2)

- この評論は1894年1月27日に第五高等中学校で行われたハーンの講演に基づくものです。
- ハーンは西洋の立場から東洋の将来に関して考察しています。

西洋と東洋は、将来、それぞれの産業発展と人口増加の過程で対立が予想されるが、東洋の人々が低いコストで質素な生活を保つならば、東洋が優位であると論じています。



2 ラフカディオ・ハーン 「極東の将来」 (THE FUTURE OF THE FAR EAST) (3)

- ハーン 「極東の将来」 は、九州・熊本の精神 (Kyushu or Kumamoto spirit) に言及する次の文章で閉じられます。
- “… then I would conclude by saying that I think the future greatness of Japan will depend on the preservation of that Kyushu or Kumamoto spirit, the love of what is plain and good and simple, and the hatred of useless luxury and extravagance in life.” 現在、熊本大学構内のレリーフにある言葉です。

3 ラフカディオ・ハーンの熊本時代 まとめ

- ハーンは、その生涯を通してギリシャ、アイルランド、フランス、イギリス、アメリカ、フランス領西インド諸島、そして日本へと移動を続けて、様々な空間と文化の越境を経験した人物でした。
- 多様な空間と文化の越境経験が、熊本時代のこの評論にも反映されているのではないのでしょうか。



4 夏目漱石の熊本時代(1)

- 小説家として著名な夏目漱石（夏目金之助 1867-1916）は、1896年4月に第五高等学校に英語教師として着任し、その後1900年に英国留学に旅立つまでの4年3ヶ月を熊本で過ごしました。
- 後年の小説家としての漱石の展開を考える上で、熊本時代の経験の持つ意味は小さくありません。



4 夏目漱石の熊本時代(2)

- 熊本での漱石は、当時の五高生の眼に「生粋の江戸っ子」として新鮮に映ったようです。
- 英語教師としての漱石は、生徒に対して授業時にはきわめて厳格に接し、特に教科書の「下読み」(予習)が不十分な生徒に対して徹底して厳しく臨むことで知られていました。
- 授業の進度もかなり速く、教え子の寺田寅彦によれば「逐字的解釈」ではなく「達意を主とする遣方」に従って次々に読み進めていくのが、漱石の英語授業の方法でした。

4 夏目漱石の熊本時代(3)

- 一方で漱石は、生徒に対して実に面倒見のよい教師でした。漱石の指導の熱心ぶりは、着任1年目の1896年9月から文科二年・文科三年の生徒の要望に応じる形で午前7時からの英語の課外講習を開始したことに示されています。この課外授業では、漱石はシェークスピアの『オセロ』や『ハムレット』を教材に用いて授業を行いました。
- 五高での漱石の英語の授業時間数は、およそ週20時間超の授業担当時間数だったようです。教育者としての五高時代の漱石は、授業以外にも様々な活動の足跡を残しています。

4 夏目漱石の熊本時代(4)

- 例えば 1897 年 10 月の五高の第七回開校記念式では、漱石は職員総代として「夫レ教育八建
国ノ基礎ニシテ、師弟ノ和熟八
育英ノ大本タリ」の一節を含む
有名な祝詞を読んでいます。
- 職員総代を務めるなど、漱石
は、当時の五高において多くの
役割を担っていたのです。

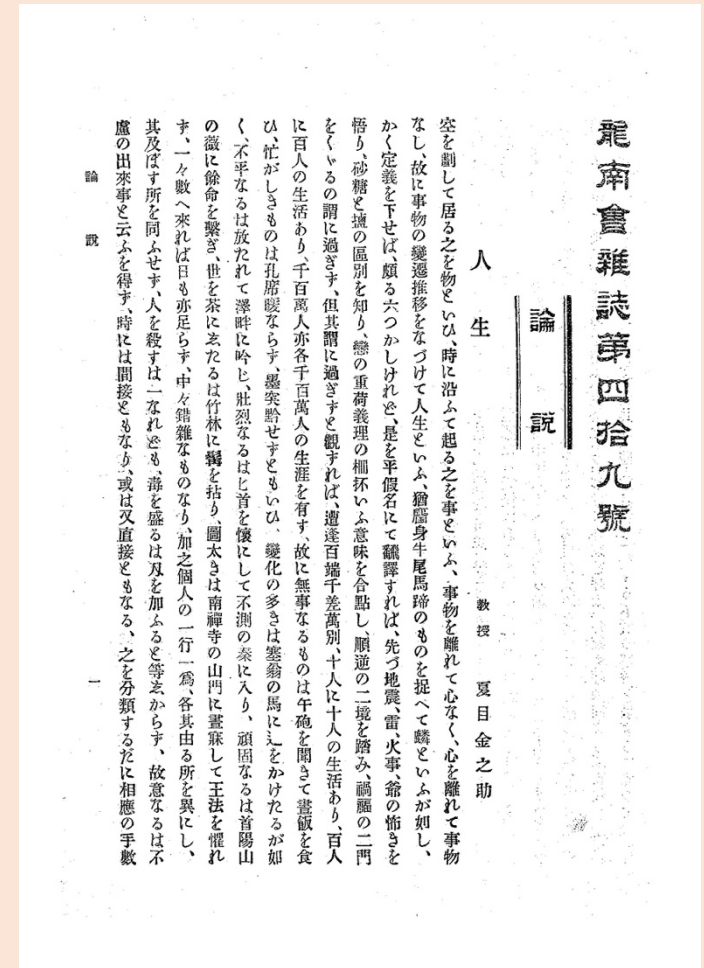


4 夏目漱石の熊本時代(5)

- 五高時代の漱石は、俳句制作に加えて評論を執筆しています。
- 評論「トリストラム・シャンデー」(『江湖文学』1897年3月)にはじまって、糸瓜先生の筆名による文章「不言之言」(『ホトトギス』1898年11月)、また「英国の文人と新聞雑誌」(『ホトトギス』1899年4月、同年6月に『龍南会雑誌』73号に掲載)、評論「小説『エイルキーン』の批評」(『ホトトギス』1899年8月)に至る一連の評論です。
- 熊本時代の漱石の文章の中でも知られているのが、第五高等学校の校友会雑誌「龍南会雑誌」に発表された「人生」です。

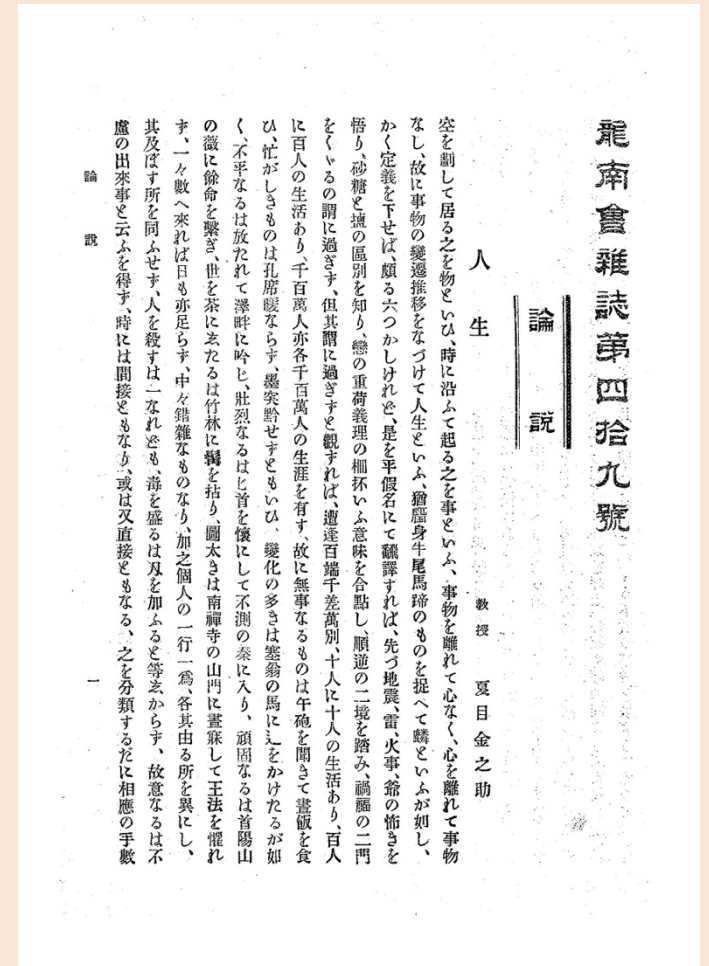
5 夏目漱石「人生」(1)

- 漱石が熊本に着任した1896年10月に第五高等学校『龍南会雑誌』49号の「論説」欄に掲載の「人生」は、この時期の漱石の思索を象徴する一篇です。
- 「空を劃して居る之を物といひ、時に沿うて起る之を事といふ、事物を離れて心なく、心を離れて事物なし、故に事物の変遷推移を名づけて人生といふ」という一節に始まる評論です。



5 夏目漱石「人生」(2)

- 漱石は当時の五高生に向けて、「人生」全般に関して語りかけながら、同時に自己を包む世界に対する認識、芸術としての小説への認識、人間の心理に関する考察などを明快に提示しています。
- そこには、後の作家漱石への展開を予見させる思考が既に現れており、例えば著名な『心』のような後年の作品との関連において、従来注目されてきました。

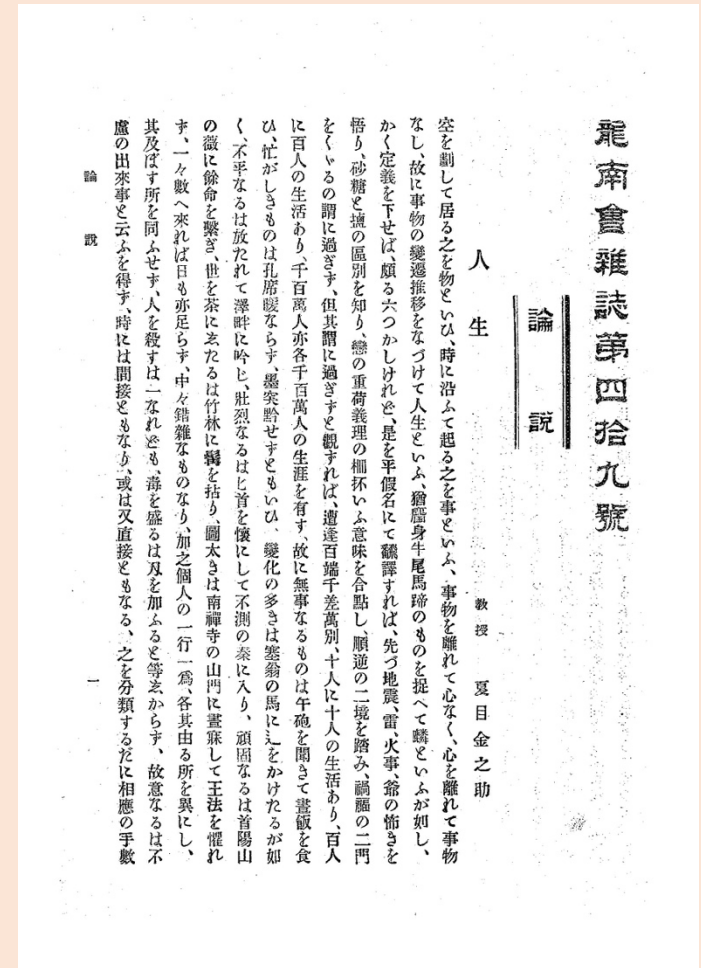


5 夏目漱石「人生」(3)

- 評論「人生」の最後は、次のような文章で閉じられます。
- 「若し人生が数学的に説明し得るならば、若し与へられたる材料よりXなる人生が発見せらるゝならば、若し人間が人間の主宰たるを得るならば、若し詩人文人小説家が記載せる人生の外に人生なくんば、人生は余程便利にして、人間は余程えらきものなり、不測の変外界に起り、思ひがけぬ心は心の底より出で来る、容赦なく且乱暴に出で来る、海嘯と震災は、啻に三陸と濃尾に起るのみにあらず、亦自家三寸の丹田中にあり、険呑なる哉」

5 夏目漱石「人生」(4)

- この評論の中では、「不可思議のもの」の存在や、人間における「自知の明」の欠落について論じられています。
- 漱石は、「人生」の内包する不確定性の指摘を通して、日清戦争後の時代状況を生きる当時の五高生に対して、同時代の人間の生き方がいかにあるべきかを、一人の同時代人として問いかけていたと考えることもできます。



6 夏目漱石の熊本時代 まとめ

- 先のハーン同様に、漱石もまた、取り上げた熊本時代を含めて、自らが慣れ親しんだ環境から離れて外部の多様な世界と異質な他者に触れた経験を持っています。
- それらの経験こそが後年の作家としての漱石の文学世界を成立させたと考えることができます。熊本時代も、その経験の一部でした。



終わりに



***今回の紹介では、熊本ゆかりのハーンと漱石を取り上げましたが、日本語日本文学研究室では、広く日本の言語や文学、文化に関係する様々な対象を、自由に学ぶことができます。**

***少しでも興味を持たれた皆さん、
熊本大学文学部文学科の
日本語日本文学文研究室で
お待ちしております！**